

国立大学法人香川大学学長候補適任者所信

2017年4月26日

国立大学法人香川大学学長選考会議議長 殿

学長候補適任者 氏名

寛 善 行

(自署)

香川大学の次期学長の任期は、2016年度から始まった6年間の「第3期中期目標中期計画」の主要期間にあたります。従って、次期学長の使命は、教育、研究、地域連携・社会貢献、国際化への対応、管理運営面の全てにおいて、目標の達成へ向けたリーダーシップを発揮することです。さらに、特筆すべき使命として、2018年4月に開始予定となっている、新学部設置や学科新設、学部・研究科の改組をスムーズに軌道に乗せ、動き始めたこれらの改革の歯車を止めることなく「大学全体の改革」というさらに大きな歯車の回転に繋げることだと考えます。

今後の大学全体の改革としてはまず全学共通教育の改革が挙げられます。既に大学教育基盤センターを中心に平成27年度から全学共通教育の改革行程表が作成され、平成28年度から主題C「地域理解」が新設、29年度からはその必修化が始まっています。主題Cの実践型科目の一つである「瀬戸内活性化プロジェクト」などは、学生の地域理解向上や地域の人々と香川大学の距離を縮めることに大きな役割を果たし始めています。主題B「現代社会の諸課題」に関しては、課題解決方法の手段として創造工学部で開始されるデザイン思考の手法の導入が期待されます。また、本邦大学生の授業外学習時間が他国と比べ格段に少ないことが危惧されていますが、学部の枠を超えた自由選択型副専攻プログラム（ネクストプログラム）や副学長時代にその計画・立ち上げに参画しました English Café の充実化、CALL（Computer-Assisted Language Learning）などによる語学学習などを推進し、自習時間の増大の契機にしたいと思います。もう一つの喫緊の課題は大学院改革です。大学院改革は本学の研究力向上とも直結した課題です。新設の創造工学部は創造工学研究科の設置準備に入りますが、現在の工学部工学研究科が経年的に抱える定員超過の問題を併せて解決し、研究力向上を図らねばなりません。医学系研究科臨床心理学専攻も公認心理師の受験資格を取得出来るように着実に設

置準備を進めなくてはなりません。一方、人文社会科学系の大学院に関しては、多くの問題を抱えており、抜本的な改革に着手する必要があると認識しています。

国立大学法人運営費交付金に関して文部科学省が決めた3つの枠組みのうち「重点支援①」を選択した香川大学は、地域への貢献を果たしながら、特色や強みのある分野で国内外に向けてアピールする必要があります。大学運営資金が乏しい中、予算編成の面ではある程度強弱をつけることは戦略上避けられないと思います。すなわち、本学の強みとして内外から評価されるフラッグシップといえるいくつかの研究に関しては、他の大学の追随を許さないレベルまで展開できるように支援することが、結果的に医農工連携による新規大型研究の立案・進展につながると思います。一方で、萌芽的研究や現時点では研究成果のベネフィットが明らかでない研究を大事に育てるのも大学の重要な使命です。私は研究担当理事として、研究戦略室による学内の潜在的な研究シーズの掘り起こし、有力シーズを有する研究者同士のマッチングを進めてきました。また、社会連携・知的財産センターを中心に四国 TLO と共同で産学連携を推進してきました。今後も、香川大学の研究の強み・特長を一層際立たせた研究戦略を構築し、社会や産業界へさらに強くアピールしていきたいと思います。

運営費交付金が毎年縮減される中、財務状況を好転させるためには、外部からの競争的資金獲得に注力することは当然です。科学研究費補助金などのボトムアップ型とは別に、各種省庁からの大型のトップダウン型外部資金の場合、公募が開示された時点ですでに採択される候補研究グループがいくつかに絞られていることが多いようです。この点で、本学は地方に位置することもあり、情報収集の点で後れを取っていると感じています。地方の国立大学でも中央省庁に定期的に構成員を派遣して、積極的に情報収集を図っている大学が少なからずあります。すぐに派遣できる適切な構成員がいるかどうかは不明ですが、できる限りアンテナを張り情報収集を図りたいと思います。特許権に関しては、特許申請をする前に残念ながら論文発表などを行ってしまった事例が少なからずあるようです。研究担当理事として、特許性の有無などを本学所属の研究者から知的財産センターへ早めにご相談していただく

べく、フローチャートを作成し各研究者への公知作業を進めています。一方、産業界を中心とした地域からの支援を積極的に得るための方策を講じる必要があります。大学からの研究成果に関する情報発信は現在の10倍以上に拡大すべきだと思います。香川大学とはどういう大学かというブランディング作業を徹底し、卒業生、保護者、関連企業などからサポーター会員を募るなどの組織作りも行いたいと思います。

香川大学は四国の国立大学法人の中で文系学部と理系学部のバランスが最も取れた大学です。この特徴は、昨今の「理系」重視の風潮や外部資金獲得圧力が強まる中では弱点と言われる方もおりますが、私はそうは思っておりません。これからの学問は「文系」や「理系」といった垣根を意識しない方向へ発展するのではないのでしょうか。「文」と「理」は元々対立する学問ではありません。「全ての研究は『文』に通じる」とは、哲学者 鷲田清一先生の言葉です。内外から機能強化を強く求められている香川大学にとって、現状を容認しとどまることはもはや許される状況にはありません。もし私が次期学長としてのご指名をいただきましたら、「文」と「理」の垣根を跳び越え総合大学としての香川大学の潜在能力を存分に発揮し、教職員一丸となって改革を力強く前進させ、第3期中期目標・中期計画期間を成功に導きたいと思います。